



#32

地球は青かった。
そして落花生は肌色だった。

著: 藍澤たすく
イラスト: かもめ遊羽

「いいい、眺めだなあ……」
 大熊伸夫は旧校舎の屋上で腹這いになって、双眼鏡で眼下を眺めていた。ちなみに旧校舎の屋上は立ち入り禁止になっているため、伸夫以外に人影はない。
 そして彼の視界にあるのは県下でも有数の大きさ誇る50mプールだった。
 奇しくも時は放課後。

プールでは井山高校女子水泳部の練習が行われている真っ最中だった。
 「あ、やっぱり競泳水着って最高だよなあ……」

伸夫は屋上の金網に顔を押しつけんばかりにしてプールを……正確には女子水泳部の娘たちを……ガン見していた。

「特に鳴滝さん、また成長したんじや……でゅふふふ……」

伸夫の視線は女子水泳部部長の鳴滝静香の大きな胸に釘付けだった。その大きさは背泳ぎで水を掻くたびに水着からはみ出てこぼれそうになるほどだった。

伸夫はだらしなく鼻の下を伸ばしたまま、親指でピンとピーナッツを一粒はじいた。

「うーん、でも坂本さんの形の整った美乳も捨てがたいしなあ……」

などと言いながらも、伸夫は一瞬だけ上を向いて器用にピーナッツを口で受ける。

ぼりぼりとピーナッツをかじりながら、伸夫はさらにピン、ピン、ピンと三粒続けてまたピーナッツをはじいた。

「顧問の御堂先生もな、いいおっぱい持ってるんだけどな、なんで水着にならないんだろ
 うなうもつたないよなあ」(ヒント…顧問は普通泳ぎません)

などと言いながらも、伸夫はまた器用に3粒すべてを口で受けた。
 ぼりぼりぼり。

「さして、いよいよメインディッシュを……」

伸夫はおもむろに女子水泳部の部屋に双眼鏡を向けた。

そこには天窓のわずかな隙間から覗く着替えの光景が見え……。

「小俣（おまた）、見たか?！」

「はい琴音（ことね）部長！ 小俣は目撃したのです！ 心のカメラで衝撃的瞬間を激写したのです！」

誰もいないはずの屋上に、突然女子の声が響いた。

伸夫が慌てて背後を振り向くと、そこには二人の女子生徒がいた。

一人は140センチあるかないかわからないぐらいの小さな少女だった。一見小学生かと思ふほどだったが、制服のタイが水色なのでおそらく伸夫と同じ2年生なのだろう。腰まであるおさげの三つ編みにぐるぐるメガネがきらりと光っている。

「おお……！」

そしてもう一人の少女を見た瞬間、伸夫はこの突然の状況も忘れ、思わず感嘆の声を洩らし

た。
それはその少女が、さきほどのぐるぐるメガネちゃんとは対照的に、170センチはありそうな長身にくわえ、出るところは出て引つ込むところはしつかり引つ込んでいるというナイスバディの持ち主だったからだ。

伸夫的には「ナイスおっぱい！」と叫びたくなるような見事なプロポーズションだった。

シヨートボブにきりっと引き結ばれた桜色の唇。深い鶯色の瞳にすっと通った鼻梁、まるでアクセサリーのように整った耳朶。

少女はその全身に理知的でクールな雰囲気を感じていた。百人がすれ違えば百人が振り返るほどの完璧美少女だ。

しかし奇異なことにその少女は右目にアイパッチをして、なぜか右手に黒いステッキを持ち、それで左手の掌をとんとんと叩いていた。

だが伸夫の視線はその大きなおっぱいに釘付けになっていて、その違和感にまったく気づくことはない。

やがてそのおっぱい……いや、少女がつかつかと伸夫に向かって歩み寄ってきた。

その表情は厳しく、目には冷徹な光を湛えている。

「え、あの、あの、これは違うんです！ け、決して覗きとか、そういうやましい事をしてたわけじゃなくて……！」

我に返った伸夫は急いで双眼鏡を後ろに隠しながらあわあわと弁明した。犯行を自白したにも等しい台詞だったが、パニックだった伸夫がそれに気がつくことはない。

「こいつで間違いないんだな!？」

「ひっ!？」

おっぱい……いや、少女が手にしたステッキの先を、伸夫の鼻先に突きつける。あまりの迫力に気圧された伸夫はコンクリートにお尻をつけたまま、ずりずりとあとずさった。

(やばい……完全に覗きがばれてる……!?! こ、この人たち、もしかして風紀委員かなんかなのか……!?!)

目の前の少女の鋭い視線に射すくめられた伸夫は、まるで蛇に睨まれた蛙のように脂汗を流したまま硬直した。

「はい、琴音部長！ 彼を見せてくれた初速、投擲角度、加速度、着口……すべて理想的だったのです！ 小侯は感動したのです！」

「そうか！ やはり彼こそが我らの求める逸材なのだな！」

「はい琴音部長！ 小侯はそう確信するのです！」

「いつ……ぞい……?？」

てっきり自分の覗きを責められ、職員室にでも連行されるかと思ったら、何やら雲行きがおかしい。

まったく状況がつかめず、仲夫は戸惑った顔で二人を交互に見つめた。

「貴様、名はなんと言う？」

「へ？ 大熊仲夫……ですけど？」

「大熊か！ いい名だ！ きつとご両親が『将来大きな熊を飼えるように』と思つてつけてくださったのだらうな！」

「え？ いや、大熊は名字なんで……」

「そうと決まれば早速行こう、熊夫くん！」

「勝手に人の名前縮めないでもらえますか！ つていうか、行くつてどこへ？」

「もちろん決まつてるだらう！ 我が『空にはじいたピーナッツを上手に食べる部』、略して

『（ピーー）部』にだ！」

「略し方がおかしいですし、なんか放送禁止用語っぽくて卑猥ですよ!? つていうか、そんな部活本当にあるんですか!? ……あつ、やめてくださいよ！ そんなに無理矢理手を引つ張らないで……ああー……!?!」



「ようこそ、我が『（ピーー）部』へ！ 我々は熊夫くんを歓迎するぞ！」

「小侯も歓迎するのですー！」

なしくずし的に部屋まで連れてこられた仲夫は凸凹コンビな少女たちを前にぎこちない愛想笑いを浮かべていた。

半分は無理矢理連れてこられたのだが、もう半分は琴音のおっぱいの魅力に抗がえなかったというのが正直なところだ。男つて悲しい。

「ところでおっぱいさん……じゃなかった、琴音さん。ここは一体どういった部活なんですか？」

「よくぞ訊いてくれた熊夫くん！ 我が『空にはじいたピーナッツを上手に食べる部』、略称『（ピーー）部』は空にはじいたピーナッツを上手に食べることを目的にした崇高な活動をしているのだ！」

「……いや、まんまなんですけど……つていうか、むしろ何の説明にもなつてないんですけど……」

誇らしげに胸を張る琴音のおっぱいに目を奪われつつ、嘆息混じりに仲夫が呟く。

「なんだと、貴様！ 貴様は我が『（ピーー）部』の活動をバカにする気か!？」

「い、いや、決してそんな訳じゃないんですけど……!」

「まあまあまあ、琴音部長は熱くなりすぎなのです。ここからは小侯が説明するのです」
激昂する琴音を押さえて、ぐるぐるメガネの少女が前に進み出た。

「我が『(ピーー)部』は全国でも有数の実力を持つ部活なのです。その実力は昨年も全国大会2位まで登り詰めたほどなのです」

「え？ ほかの学校にもおんなじ部活があるの……？」

「そうだ！ だが2位！ 2位なのだ！ 1位ではないのだ……！」

伸夫の疑問に^{こた}応えることなく、琴音が悔し^{くや}そうに目をつぶって握りこぶしとおっぱいを震わせている。

「しかし！ 今、我が部には熊夫くん、君がいる！ これで今年の全国大会優勝は約束されたようなものだ！ はーっはっはっは！」

高笑いするたびにたゆんたゆんと揺れる琴音のおっぱいに伸夫の目は釘付けだった。男って本当に悲しい。

「でも大会って具体的には何をやるんですか？」

「なに、いたって簡単なことだ。おい、小俣！」

「はい、琴音部長！」

琴音に促されて、三つ編み少女はいそいそとホワイトボードに何やら大きな紙を磁石でめた。

「まずピーナッツを毎秒800 kmの初速で大気圏外に射出するのです」

「はあ？」

「そして周回軌道を回って再び地上に落下してきたピーナッツを見事に食べるのです！」

「はあああああ!？」

ホワイトボードに貼った図を前に生き生きと説明する小俣とは対照的に、伸夫は訳がわからない、という表情を浮かべた。いや、この説明を聞けば誰でもこの反応しかできないだろう。

「大気圏外って……だいたいその時点でピーナッツ、燃え尽きてるでしょ!？」

「心配は無用なのです！ 我が『(ピーー)部』は有り余るバイオテクノロジー技術を使って大気圏外にも到達できる頑丈な落花生、その名も『落下星β』の開発に成功しているのです！」

「すごい技術力だ!？」

「しかもその落下星βを射出する射出機『YOU』、宇宙に行ってくればいーじゃんΩ』も改良に改良を重ねて、今やNASAでも使用されているぐらいの高性能を誇るのです！」

「すごい科学力だ!？ っていうか、もうそっちを本業にしたほうが良くない!？」

あまりにもトンデモな展開に伸夫のツッコミが全然追いつかない。

「……待てよ……」

伸夫ははっと我に返る。

「あの……周回軌道を回って落下してくるピーナッツって……ものすごい速度なんじゃないの?？」

伸夫の当然の疑問に、琴音と小俣はさつと同時に目を逸らす。

「それを食べる……つまり口で受けるってことは、要するに死んじゃうんじゃ……ないの？」

二人は目を逸らしたまま、伸夫と目を合わそうともしない。
やがて。

「あれは悲しい事故だったんだ。なあ、小俣……」

「ええ、黒崎さんには悪いことをしましたね……」

二人が囁くように呟いた。

「ちよ!? ええ、なに!? その黒崎って人、死んでんの!?」

「安心してください、熊夫さん。黒崎さん、最期はとってもいい笑顔でしたから!」

「『最期』って何だよ!? 黒崎さん確実に死んでんじゃん!!」

言うが早いか伸夫は荷物をまとめ部屋の出口に向かった。

「!? どこへ行くのだ熊夫くん!?」

「こんな所には1秒たりとも居られません! 俺はもう帰らせてもらいます!」

「しよががない……やれ! 小俣!」

「はい、琴音部長!」

「!?」

突然伸夫の体がびくりとも動かなくなった。

というか正確には動けなくなった。

なぜなら伸夫の体はがっしりとしたロボットにしつかりと羽交い締めはがに拘束こうそくされていたからだ。

「な、なんだこいつ!?」

「人型拘束ロボット『かまってちゃん^{アルファ}』なのです!」

「カマッテ、カマッテ、アタシヲヒトリニシナイデー、カマッテ!」

「ふ、ふざけんな! 放せ! 放せー!! ふぐっ!?」

伸夫の口には何かが入った。それは銀色に光るマウスピースだった。

「特殊合金で作られた特別製マウスピース『YOU、落下星βなんか噛み砕けばいいじゃない∞』なのです。去年はこれの開発が追いつかなかったので黒崎さんには不幸な事故が起こってしまったのです。でも今年にはばっちりです。これを使って然るべきタイミングで噛めば、必ずやピーナッツを上手に食べられます!」

「然るべきタイミングってなんだよ!?」

「ええと、落下星βは着口時にはマッハ24で飛んでいるはずですから、噛むタイミングは0.00000001秒もあります! くまぼんさんの才能なら余裕です!」

「くまぼんって誰だよ!? っていうかお前ら絶対俺を殺す気だろ!」

「さあ、すでに落下星βは昨日射出してあります。早速落下地点まで参りましょう!」

「や、やめろ！ 放せ！ 放せー！ た、助けて、お母さー！ん！ もう覗きもしませんから！ ピーマンも残さずちゃんと食べますから！ 助けて！ 誰かたーすーけーてー！ー！！」

◆ 「くっそ！ 放せー！ 放せー！」

「ダメヨ！ダメダメ、モットカマツテクレナキヤ、ダメダメー」

かまつてちゃんaに拘束されたまま、伸夫は学校の裏山の頂上に連れてこられていた。頂上はちょうど半径10mほどの円形の平地になっている。

「落下星βはあと1分後にここに落下してくるのです！」

小俣は木の枝で地面にバツテンを描きながら、かまつてちゃんaを手招きする。

かまつてちゃんaは指示通りにバツテンの上で待機を始めた。

「見ろ！ 落下星βが戻ってきたぞ！」

琴音の声に、伸夫は空を見上げる。

そこには太陽がふたつ見えた。

いや、正確にはひとつが太陽で、もうひとつはオレンジ色の炎に包まれた落下星βだった。

落下星βはぐんぐんと地上に近づいてくる。最初はピンポン玉大だったそれが、野球ボール、バレーボール、くす玉、大玉転がしの大玉……といった具合でどんどん大きくなる。

……つていかか大気圏突入にも耐えるピーナッツつて何なんだよ!?

「さあ、熊夫くん！ あと5. 3599287576秒後がベストタイミングだ！ 『上手にピーナッツを食べて』くれたまえよ！」

◆ 「もうだめだ……死ぬ……絶対死ぬ……」

伸夫の目の前を、オレンジ色の火球ではなく、琴音のおっぱい、鳴滝静香のおっぱい……果ては幼稚園時代のタンポポ組担任だった霧島先生のおっぱいが通り過ぎていく。

そう、あまりの恐怖に伸夫は走馬燈ならぬ走乳燈を見始めていたのだ。

そして落下星βはどんどんと近づいて来て……

◆ 「ふ……昨日は本当に死ぬかと思っただぜ……」

教室から校庭に穿たれた巨大な隕石孔を見ながら、伸夫はため息混じりに呟いた。

結局落下星βは小俣沙智子の微かな計算ミスで本来の大気圏突入角度から0.00001度ずれ、伸夫が拘束されていた裏山ではなく、学校の校庭に落下したのだった。

ちなみにこの大騒動を起こした琴音&小俣コンビは仲良く停学を喰らっているので仲夫はつかの間の平和を享受できているというわけだ。

「あいつらが戻ってきたら絶対つかまらないようにしないと……はあ……でも一体どうすればいいんだろう……もう思い切つて転校でもすっかな……」

仲夫が嘆息しながら、手持ちぶさたに手許のシャーペンをくるくると回した。
その瞬間。

「回転速度、バランス……いいわ、とてもいいわ……ぜひ我が『シャーペンを上手にくるくる回す部』に欲しい逸材だわ……」

仲夫の後ろで何やら不穏な眩きをする少女に、彼はまだ気づいていなかった。

おしまい